

NPO法人YMCAコミュニティサポート

児童虐待防止のための 養護施設支援事業 報告書

独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業

2014年3月

1. 事業の経緯

朗読劇「ハッピーバースデー 2012 横須賀公演」を機に始まった横須賀市の児童虐待防止と児童養護施設の支援活動は、学生たちによる児童養護施設支援ボランティアという形で継続している。当法人が事務局となり、ボランティアをする学生の登録や派遣先施設との連絡調整、活動のコーディネートなどを行っている。

2013 年度には朗読劇「ハッピーバースデー」実行委員会の活動を引き継ぐ組織「ハッピーのたろんプロジェクト実行委員会」立ち上げ準備を進めた。実行委員会で培った団体、個人、行政の関係部局などとのネットワークは、事業の継続に大きな力となっている。

支援の継続のため、独立行政法人福祉医療機構の助成を受け、ボランティアの活動費や啓発活動の費用に充てる事ができ、活動が広がった。

2. 児童養護施設へのボランティア派遣

横須賀市には 2 つの養護施設がある。その一つの誠心会「しらかば子どもの家」に学生ボランティアを派遣している。

2-1. 目的

横須賀市内の児童養護施設に暮らす子どもたちは 90%以上が虐待を経験している。学生ボランティアを派遣することで、スタッフではない若いお兄さん、お姉さんと触れ合う機会を作り、不足しがちな心の充足感を補う一助とする。また、多忙な施設スタッフに代わり子どもたちに寄り添うことで、子どもたちの情緒の安定を助けることを目指す。

2-2. 2013 年度の活動実績

誠心会 しらかば子どもの家での活動を、以下のとおり行った。

6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
2回	2回	8回	7回	2回	0回	3回	2回	5回	4回
11名	13名	25名	11名	6名	0名	4名	2名	11名	7名

以上 35回 のべ90名



2-3. 養護施設ボランティアの活動報告

活動毎に活動者から報告を提出してもらっている。その中から抜粋し、掲載。

うれしかったこと

- ・子どもたちみんなパワフルで、駆けずり回って汗をかいていました。お気に入りのおもちゃを見せてくれました！
- ・久しぶりの活動でしたが、子どもたちは覚えていてくれていて嬉しかったです！携帯の色まで覚えてくれてビックリしました。
- ・学習のお手伝いをしました。間違っただけをもう一回一緒にやって、子どもが「そっかー！」と納得した時は嬉しかったです。
- ・行くたびに笑顔で迎えてくれるのが毎回とてもうれしいです。

困ったこと

- ・ボランティアが少ないと子どもたちと全員と十分に遊んであげられなかったと感じた。
- ・今日は私を取り合ってケンカになってしまいました。職員さんに2人同時に少しずつ見てあげてというアドバイスしていただいてありがたかったです。幼児さんたちに片づけをさせるのにも苦労しました。どんな声かけがいいのか考えたいです。
- ・泣いてしまった時にどうしていいかわかりませんでした。また「やってはいけない事」をどう注意したらいいのかわかりません。多少強く言っていますが、それが本当に正しいのかも分からずに困惑します。

気付いたこと

- ・職員の方々が、メリハリをつけて子どもたちに接しているのが印象に残った。ダメなことはダメと、目を見て言うことが大切だと思った。子どもたちは、突然ケンカをはじめたり、危険なことをしたりするけれど、それに気づけなかったこともあったと思うので、常に目配りをしておかなければいけないと思った。
- ・歯磨きの手伝いをやらせていただいたのですが、なかなか上手くいかなかったので、子どもの歯磨きのコツなどを勉強したいと思いました。

2-4. ボランティア会議の実施

月に一度ボランティア会議を開催し、活動の振り返りや次月の計画などを話し合っている。

児童養護施設での活動の中で困ったことや気づいたこと、スタッフから言われたことなどを共有することで、学生ボランティアの資質の向上に結びつくことを目的とする。

6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
6名	7名	9名	5名	6名	7名	5名	8名	13名	16名

のべ82名

2-5. 成果と課題

学生たちの積極的な参加により、年間を通してボランティアを派遣することができた。支援先のスタッフからは、「子どもたちになじんでくれている」「スタッフが多忙な中、大変助かっている」という言葉をいただいている。学生は継続的に通うことで子どもたちと親しくなり、成長の過程を見る事ができ、活動に喜びを感じている。

ボランティア会議を持ち、活動している中での疑問や困ったこと、施設スタッフの助言などを共有することで、疑問や不安が解消したり、以降の活動への助けになっている。

課題としては、派遣できる学生の数にバラつきがあり、コンスタントに派遣することができていない。活動している学生からも、充実した活動をするためには、1回の活動に4人以上が望ましいという声があるが、現在は1人～2人で活動する日も少なくない。今後は登録ボランティアの数を増やすと同時にひとつの大学に偏らないように多くの大学からの登録を目指したい。



3. 啓発活動

児童虐待防止の啓発及び児童養護施設理解の促進のため映画の上映会と学習会を開催。

日時：2014年2月22日（土） 10：00～13：00

第1部 上映会

第2部 学習会

場所：神奈川県立保健福祉大学 講堂

対象：活動ボランティア、学生、一般市民（参加者170名）

3-1. 上映会

児童養護施設の現状を描いたドキュメンタリー映画「葦牙（あしかび）」を上映。



<映画の概要>

岩手県にある児童養護施設に入所する子どもたちと地域の人々との交流をつづるドキュメンタリー。子どもたちのプライバシーを守るため、スクリーンのみで公開。施設で生活する子どもたちの姿を追い、毎年増加する児童虐待の社会的背景とともに、この施設ならではの取り組みに焦点を当てる。監督は『いのちの作法』の小池征人。

※「葦牙（あしかび）」とは葦の若芽のこと。春に新芽が「牙」のように水面に点々と顔を出す様。生命力の象徴。

<参加者アンケート抜粋>

- ・近い年齢の人が出ていたけど、考えていることが私たちよりすごいことを考えていて勉強になりました。（10代女性）
- ・子どもが弁論大会で、自分自身を振り返るということの難しさと大切さ、それを乗り越えることで子どもは自分らしく、本当の自分として生きていけるのだと考えています。

その取り組む姿を見て、希望を感じました。頑張る姿がかっこよく、応援、寄り添って行きたいと思いました。(20代女性)

- ・児童養護施設に入所している子どもたちの事が良くわかりました。心の大切さ、子どもの接し方、様々なことがわかり、考えさせられます。職員方の接し方がとても素晴らしいと思いました。(30代男性)
- ・高校を卒業したら施設を出て行かなければならないため、大人になってどうやって生活するかも課題になると思います。(30代男性)
- ・虐待をするのは虐待を受けた経験者だけではないと思います。観た方々が対岸の側に行かないで自分の身近な事として感じる事が大切と思いました。(40代女性)
- ・ドキュメントで子どもたちの状態を見せていただき、涙があふれ、心に響きました。子どもの生きる「力」に少しでも支援できたらと思います。(40代男性)
- ・きれいごとではない「心の傷」の深さを知りました。(50代女性)
- ・なかなか施設の生活を知ることができなかつたので、良かったと思います。子どもたちの(施設の)理解が社会に広がれば良いと思いました。(50代女性)
- ・内容的には素晴らしいが、ちょっと長い。肉体的、精神的にエネルギーが必要な映画でした。(60代女性)
- ・とても難しいテーマで、広く人々に伝えることには大変な苦勞があると思いますが、力を合わせて伝え、さらなる力をつけましょう。(50代男性)
- ・私にも何かお手伝いできることがあればと思いました。地区の小さなことからやって行こうと思いました。(60代女性)
- ・社会的養護の必要性が改めて感じられました。(60代女性)
- ・ありのままの事実をよくとらえていてすばらしかったです。映画の題名にも感心しました。(60代女性)
- ・子どもたちの自然な成長の姿に心打たれました。(60代男性)
- ・できるだけ多くの人に関心を持ってできることを考え実践していくことが必要と思いました。(70代男性)



3-2. 学習会

①「葦牙（あしかび）」 小池征人監督の講演

- ・以前撮った映画のロケが縁で、施設から是非映画を撮ってほしいと依頼があった。テーマの深刻さに最初は受けるのをためらったが、施設の全面協力の申し出を受け、撮影を決意した。
- ・3日に1人日本のどこかで子供が亡くなっているという事実には衝撃を受け、伝えなければと思った。
- ・「母乳」と「母語」を与えられて子供は育つ。虐待を受けている子はそれを与えられていない。ならば社会がそれを与えればいい。この映画では施設のスタッフや地域の人が「母乳」と「母語」を与えて、子どもたちの心を育てている。例えば、太鼓を作っているおじさんは自分の土地に建物を建てて子どもたちを合宿させている。太鼓を作りながら生きていくために大切な事を教えている。まさに「母乳」と「母語」である。
- ・映画のタイトル「葦牙」は撮影の最中に決めた。この言葉は古事記に出て来る言葉で、神が生まれる時に「葦牙の燃えるがごとく」と言って生まれたと聞いた。日本の一番最初の生命力の象徴。撮影をしていて、子どもたちの生命力、復活する力を感じた。また、「牙」という児に草冠をつけると「芽」になる。そんなことを考えてこの言葉を使った。



②横須賀市児童相談所 沼田第一支援係長の講演

- ・全国に児童養護施設は590ヶ所。施設に入所している子どもは29,000人ほど。児童養護施設で虐待を理由に入所している子どもはそのうち53%、15,000人ほど。
4年以上の長期在籍は50%、高校卒業まで在籍している子は20%。
- ・横須賀市の養護施設について
春光学園：定員80名。
しらかば子どもの家：定員40名。
入所している子は横須賀市以外の子もいる。横須賀市が担当している子は130名。
虐待を理由に入所している子は90%。高校卒業まで施設にいる子は23%。
- ・横須賀市の里親制度について
現在里親は17名、そこで暮らす子が15名いる。
- ・横須賀市独自の制度「ボランティア里親」について
週末や長期休暇の時などに子どもを預かる制度。登録者は8名。利用している子どもは10名ほど。長期里親にも協力してもらって、併せて15名くらいの子が施設で生活しながら家庭の体験をしている。



- ・進学について

20%程度の子が高校卒業まで施設で生活する。大学進学率は11%（一般家庭では54%）。原因は、学習の遅れと経済的な問題。

- ・児童虐待について

平成24年度の虐待件数は全国で66,807件。20年前の48倍。10年前の3倍となっている。ただ、虐待が単純に増えているということではなく、虐待への関心が高くなり通報が増えているということもある。

- ・虐待を受けた子に問題行動があるのは事実。だが、だれしも生まれた時には無垢で純粋で、今でもかけがえのない存在である。親を失うのも、親からひどい目に遭うのも、その子が選んだ人生ではない、子どもに責任はない。今日の上映会を機会に、これまで以上に児童養護施設でがんばって生活している子どもたちへのご理解と応援をお願いしたい。

③養護施設ボランティアからの報告

- ・継続的に通うことで子どもの成長を見る事ができ、以前できなかった事ができたりする姿を見るのはうれしい。
- ・活動していて自分たちの力不足を感じる場面がある。
- ・子どもたちのためにボランティアをしているが、職員さんの負担軽減にとどまっているという感じがある。



3-3. 成果

市民に向け、上映会と学習会を一緒に行ったことで、多くの人に児童養護施設の現状や横須賀市の取り組み、学生ボランティアの活動について理解してもらう事ができた。学生ボランティアの学習の場としても非常に有益だった。また、児童虐待防止に関心のある人が多いことがわかり、今後事業に関わりたいと申し出てくれる人も出るなど、今後の発展が期待できる。

会場に置いた募金箱には37,311円の浄財が集まった。養護施設への寄付と、来年度の事業に役立てたい。寄付を申し出てくれる個人、団体もあり、継続した支援への手掛かりができた。